

解説 森本和夫

風狂



叢刊^{アングロ}

日本文学における美と情念の流れ

編集

大久保典夫

笠原伸夫

久保田芳太郎

澁澤龍彦

濱田泰三

森本和夫

校注・解題 田中伸

山田清市

中本環

風狂

解説

森本和夫

現代思潮社

風狂日本文学における美と情念の流れ

1973 年 4 月 28 日 第 1 刷発行

発行者／石井森二

発行所／株式会社現代思潮社 東京都文京区小日向1-24-8

電話／代表 (943) 4406 振替／東京 72442 番 郵便番号 112

本文印刷／第一印刷株式会社

装本印刷／広橋精版印刷株式会社

製 本／有限会社今泉誠文社

(落・乱丁のものは本社またはお買い求めの書店でおとりかえいたします)

0393-80005-1909

目次

草枕／夏目漱石	3
ピルロニストのように／武林無想庵	10
浮浪漫語／辻潤	25
酔狂者の独白／葛西善蔵	32
山高帽子／内田百閒	59
木魚庵始末書／稲垣足穂	86
底なしの寢床／稲垣足穂	98
無盡燈／石川淳	107
いずこへ／坂口安吾	137
ヴィヨンの妻／太宰治	156

虚無／高橋新吉……………	178
大宰帥大伴卿讀 ^ル 酒 ^ヰ 歌十三首／大伴旅人……………	191
山家集／西行……………	195
方丈記／鴨長明……………	205
狂雲集／一休宗純……………	228
新編覆 ^カ 醬 ^{しょう} 集／石川丈山……………	243
笈の小文／松尾芭蕉……………	260
放屁論／平賀源内……………	279
痿陰隠逸伝 ^{なよみんいつでん} ／平賀源内……………	292
良寛詩抄／良寛……………	301
解説「風狂」の構図――森本和夫……………	327

日本文学における美と情念の流れ
風狂

草枕(抄)

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向う三軒両隣りにちらちらする唯の人である。唯の人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行く許りだ。人でなしの国は人の世よりも猶住みにくからう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家

という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊とい。

住みにくき世から、住みにくき煩いを引き抜いて、難有い世界をまのあたりに写すのが詩である、画である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云えば写さないでもよい。只まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも瑠璃の音は胸裏に起る。丹青は画架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に映る。只おのが住む世を、かく観じ得て、霊台方寸のカメラに澆季瀾濁の俗界を清くうらかに収め得れば足る。この故に無声の詩人には一句なく、無色の画家には尺牘なきも、かく人世を観じ得るの点に於て、かく煩悩を解脱するの点に於て、かく清浄界に出入し得るの点に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの点に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの点に於て、——千金の子よりも、万乗の君よりも、あらゆる

る俗界の寵児よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知った。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟った。三十の今日はこう思うて居る。——喜びの深きとき憂い愈深く、楽みの大いなる程苦しきも大きい。之を切り放そうとすると身が持てぬ。片付けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寝る間も心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえって恋しかる。閨僚の肩は数百万人の足を支えて居る。脊中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食わねば惜しい。少し食えば飽き足らぬ。存分食えばあとが不愉快だ。……

余の考がここ迄漂流して来た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損くなった。平衡を保つ為めにすわやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺程な岩の上に卸れた。肩にかけた絵の具箱が腋の下から躍り出した丈で、幸いとい何の事もなかった。

立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せた様な峯が聳えている。杉か桧か分らないが根元から頂き迄悉く蒼黒い中に、山桜が薄赤くだんだらに棚引き

て、続ぎ目が確と見えぬ位霧が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去ったか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めて居る。天辺に一本見えるのは赤松だろう。枝の間の空さえ判然として居る。行く手は二丁程で切れて居るが、高い所から赤い毛布が動いて来るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難義だ。

土をならす丈なら左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平らにしても石は平らにならぬ。石は切り砕いても、岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の為めに道を譲る景色はない。向うで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならぬ。巖のない所でさえ歩るきよくはない。左右が高くて、中心が窪んで、丸で一間幅を三角に穿つて、其頂点が真中を貫いていると評してもよい。路を行くと云わんより川底を涉ると云う方が適當だ。固より急ぐ旅でないから、ぶらぶらと七曲りへかかる。

忽ち足の下で雲雀の声がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。只声だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空気が一面に蚤に刺されて居たたまれない様な気がする。あの

鳥の鳴く音には瞬時の余裕もない。のどかな春の日を鳴き尽くし、鳴きあかし、又鳴き暮らさなければ気が済まんと見える。其上どこ迄も登って行く、いつ迄も登って行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入って、漂うて居るうちに形は消えてなくなつて、只声丈が空の裡に残るのかも知れない。

巖角を鋭どく廻つて、按摩なら真逆様に落つる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いいや、あの黄金の原から飛び上がってくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上る時も、また十文字に擦れ違ふときにも元氣よく鳴きつづけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さえ忘れて正体なくなる。只菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の声を聞いたときに魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全体が鳴くのだ。魂の活動が声にあつたものうちに、あれ程元氣のあるものはない。ああ愉快だ。こう思つて、こう愉快になるのが詩である。

忽ちシュレーの雲雀の詩を思い出して、口のうちに覚え

た所だけ暗誦して見たが、覚えて居る所は二三句しかなかった。其二三句のなかにこんなものがある。

We look before and after

And pine for what is not :

Our sincerest laughter

With some pain is fraught ;

Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.

「前を見ては、後へを見ては、物欲しと、あこがるゝかなわれ。腹からの、笑といへど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思い切つて、一心不乱に、前後を忘却して、わが喜びを歌う訳には行かない。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく万斛の愁などと云う字がある。詩人だから万斛で素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあろうが、無量の悲も多からう。そんならば詩人になるのも考え物だ。

しばらくは路が平で、右は雑木山、左は菜の花の見つづ

けである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸の様な葉が遠慮なく四方へのはして真中に黄色な珠を擁護して居る。

菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮座して居る。呑氣なものだ。又考えをつづける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍る許りだ。蒲公英も其通り、桜も——桜はいつか見えなくなった。こう山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白い丈で別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だろう。

然し苦しみのないのは何故だろう。只此景色を一幅の画として観、一卷の詩として読むからである。画であり詩である以上は地面を貫つて、開拓する氣にもならねば、鉄道をかけて一儲けするの見も起らぬ。只此景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補いにもならぬ此景色が景色としてのみ、余が心を樂しませつつあるから苦勞も心配も伴わぬのだろう。自然の力は是に於て尊とい。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

恋はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛國も結構だろう。然し自身が其局に当れば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んで仕舞う。従つてどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかる為めには、わかる丈の余裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は観て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて居る。見たり読んだりする間丈は詩人である。

それすら、普通の芝居や小説では人情を免かれぬ。苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。見るものもいつか其中に同化して苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬと云う点に存するかも知れぬが、交らぬ丈に其他の情緒は常よりは余計に活動するだろう。それが嫌だ。

苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽々した。飽き飽きた上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた

芝居はない、理非を絶した小説は少からう。どこ迄も世間を出る事が出来ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脱する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を弁じて居る。いくら詩的になつても地面の上を馳けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シュレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣りの娘が覗いてる訳でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。独坐幽篁裏、彈琴復長嘯、深林人不知、明月來相照。只二十字のうちに優に別乾坤を建立して居る。此乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船、汽車、權利、義務、道德、礼義で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐっすりと寐込む様な功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を説

む人もみんな、西洋人にかぶれて居るから、わざわざ呑氣な扁舟を泛べて此桃源に遡るものはない様だ。余は固より詩人を職業にして居らんから、王維や淵明の境界を今の世に布教して広げようと云う心掛も何もない。只自分にはこゝう云う感興が演芸会よりも舞踏会よりも葉になる様に思われる。ファウストよりも、ハムレットよりも難有く考えられる。こゝうやって、只一人絵の具箱と三脚几を担いで春の山路をのそのそあるくのも全く之が為めである。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの酔興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はそう長く続く訳には行かぬ。淵明だつて年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳を釣らずに寐た男でもなからう。矢張り余つた菊は花屋へ売りこかして、生えた筈は八百屋へ払い下げたものと思う。こゝう云う余も其通り。いくら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山のなかへ野宿する程非人情が募つては居らん。こんな所でも人間に逢う。じんじん端折りの頬冠りや、赤い腰巻の姉さんや、時には人間より顔の長い馬に迄逢う。百万本の桜に取り囲まれて、海面を抜く何百尺かの空気を呑んだり吐いたりしても、人の臭いは中々取れない。夫れ所か、

山を越えて落ちつく先の、今宵の宿は那古井の温泉場だ。

唯、物は見様でどうでもなる。レオナルド、ダ、ヴィンチが弟子に告げた言に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人の女も見様次第で如何様とも見立てがつく。どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、其積りで人間を見たら、浮世小路の何軒目に狭苦しく暮した時とは違うだろう。よし全く人情を離れる事が出来んでも、責めて御能拝見の時位は淡い心持ちにはなれそうなものだ。能にも人情はある。七騎落でも、墨田川でも泣かぬとは保証が出来ん。然しあれは情三分芸七分で見せるわざだ。我等が能から享ける難有味は下界の人情をよく其儘に写す手際から出てくるのではない。其儘の上へ芸術という着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な振舞をするからである。

しばらく此旅中に起る出来事と、旅中に逢う人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだろう。丸で人情を棄てる訳には行かないが、根が詩的に出来た旅だから、非人情のやり序でに、可成節儉してそこ迄は漕ぎ付けたものだ。南山や幽篁とは性の違ったものに相違ないし、又雲雀や菜の花と一所にする事も出来まいが、可成之に近づけて、近づけ得る限りは同じ観察点から人間を視てみたい。

芭蕉と云う男は枕元へ馬が尿するのをさえ雅な事と見立てて発句にした。余も是から逢う人物を——百姓も、町人も、村役場の書記も、爺さんも婆さんも——悉く大自然の点景として描き出されたものと仮定して取こなしで見様。尤も画中の人物と違って、彼等はおのがじし勝手な真似をするだろう。然し普通の小説家の様に其勝手な真似の根本を探ぐって、心理作用に立ち入ったり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動いても構わない。画中の人間が動くと思えば差し支ない。画中の人物はどう動いても平面以外に出られるものでない。平面以外に飛び出して、立方的に働くと思えばこそ、此方と衝突したり、利害の交渉が起ったりして面倒になる。面倒になればなる程美的に見て居る訳に行かなくなる。是から逢う人間には超然と遠き上から見物する気で、人情の電気が無暗に双方で起らない様にする。そうすれば相手がいくら働いても、こちらの懐には容易に飛び込めない訳だから、つまりは画の前へ立って、画中の人物が画面の中をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見ると同じ訳になる。間三尺も隔てて居れば落ち付いて見られる。あぶな気なしに見られる。言を換えて云えば、利害に氣を奪われないから、全力を挙げて彼等の動作を芸術の方面から観察する事が出来る。余念もなく美か美でないかと鑒識

する事が出来る。

ここ迄決心をした時、空があやしくなつて来た。煮え切れない雲が、頭の上へ垂れ懸つて居たと思つたが、いつのまにか、崩れ出して、四方は只雲の海かと怪しまれる中から、しとしとと春の雨が降り出した。菜の花は疾くに通り過して、今は山と山の間を行くのだが、雨の糸が濃かで殆んど霧を欺く位だから、隔たりはどれ程かわからぬ。時時風が来て、高い雲を吹き払うとき、薄黒い山の脊が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てて向うが脉の走つて居る所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものが、ちよくちよく顔を出す。出すかと思つと、隠れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。

路は存外広くなつて、且つ平だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぼたりぼたりと落つる頃、五六間先きから、鈴の音がして、黒い中から、馬子がふうとあらわれた。

「ここらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。大分濡れたね」

まだ十五丁かと、振り向いて居るうちに、馬子の姿は影画の様に雨につつまれて、又ふうと消えた。

樓の様に見えた粒は次第に太く長くなつて、今は一筋毎に風に捲かれる様迄が目に入る。羽織はとくに濡れ尽して肌着に浸み込んだ水が、身体の温度で生暖く感ぜられる。気がわるいから、帽を傾けて、すたすた歩行く。

茫々たる薄墨色の世界を、幾条の銀筋が斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも詠まれる。有体なる己れを忘れ尽して純客観に眼をつくる時、始めてわれは画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。只降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを氣に掛ける瞬間に、われは既に詩中の人にもあらず、画裡の人にもあらず。依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲烟飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情けも心に浮ばぬ。蕭々として独り春山を行く吾の、いかに美しきかは猶更に解せぬ。初めは帽を傾けて歩行た。後には唯足の甲のみを見詰めてあるいた。終りには肩をすばめて、恐る恐る歩行た。雨は満目の樹梢を揺かして四方より孤客に逼る。非人情がちと強過ぎた様だ。

ピロニストのように

なぜ生まれたのか、なぜ生きなければならぬのか、なぜこうやって生きているのか、そうしてなぜ老い朽ちて、なぜ死なねばならぬのか、私はもう四十だが、そうして多く考えてばかり暮らしている身だが、今もって分らない。恐らく死ぬまで分るまい。

私はただ漠然と生きている。時々金がほしいと思う事もある。けれどもそれは美人を見たり、立派な邸宅を見たり、世界漫遊がしたくなったりする時にかぎる。こうやって、まずい物をたべて、汚い着物をきて、本を読んだり、翻訳をしたり、ゴロリと臥ころんだりしている時は、何にもほしくない。そうして頗る満足だ。

併し随分退屈で困る時もある。文章は書く気にならず、本は読む気にならず、ゴロリと臥て見る気にもならず、実際在ても立つてもいられなくなるほど、退屈で退屈でたまらない事がある。そういう時には、一番景気よく新橋か柳

橋へ出かけて、大勢美人でもよんで、成金達のやりそうな馬鹿真似がしたいと思う。が、考えて見ると、私にはそんな金のありそうな筈はない。そこで美人は断念する。友達のところへでも押しかけて話し込もうかと思う。けれども友達には皆な他人だ。会って話して見たところで、お互いにごく上っ面の事しきや話す筈はない。友達はやめにする。芝居にも寄席にも行く気はしない。ただブラブラと散歩するのも下らない。どうしていいか分らなくなって、しかもいよいよ退屈でしかたがなくなる時がある。

矢も楯もたまらなくなると、とりあえず、兎に角外へ出る。歩けば露路に沿うて自然と電車通りへ出る。知らず知らず停留場の前までゆく。築地両国が来る。九段両国が来る。浅草が来る。上野が来る。三四台やりすごすうちに、自然と出かける方向がきまる。大抵は浅草へゆこうと思う。新聞広告で見たキネマ倶楽部か電気館か帝国館かへ行つて

見る気になるのである。そうしてその三館を皆見て了ったような時には、銀座へゆこうと思う。銀座はただブラつくだけだ。

帰ると大抵十一時すぎになっている。婆さんの敷いて置いてくれた寢床の中へすぐにもぐり込む。そうしていろいろな夢を見て、翌朝目がさめると、この退屈が生ずるまで、まずい物をたべ、汚い着物をき、書を読み、翻訳を続けるという、甚だ平凡な、しかも甚だ満足な日程に這入る。

——人は希望に生き、満足に死す。というような諺をば子供の時耳にした事があつた。考えて見ると、私には今全く希望というものがない。そうしてただ現在の満足だけが残っている。諺の言葉に準ずると、私は死んだ人間と云わなければならぬ。

財布の中に金がなくなると、同時に私には世の中がなくなつて了う。たとえば友人と会食する約束をしたとする。友人は私の財布にも相当の金があるものと信じてその約束を守る。然るにその当日となつて私の財布に一文の金もなくなつてゐる場合には、私は約束した会食の場処へ行く事が出来ない。葉書も買えない時がある。心ならずも私は友

人に待ちほけを食わせるようになる。従つて友人は私を信用しなくなる。友人に信用がない事は「世の中の無い」最も有力なる証拠である。

いつぞや、活動で、Beggars on horseback という文字を見た事があつた。そうして自分も亦馬上の乞食の一人だと思つた。

この世智辛い世の中に、何事もただ金ばかりで解決が出来そうに見えている世の中に、私は悠々閑々として棲息している。即ち金になりそうな事には全く頭も手も使わずに生きている。自分ながら随分愚かな人間だと思ふ。随分無能を極めた人間だと思ふ。でも仕方がないと思つている。

こういう風な傾向を持つて生まれて来たのだから止むを得ないと思つている。奮発という事をしなければ、努力という事をしなければ、人生は果して過してゆけないところだらうか？　それが為^{ため}に若し人間が必ず自滅する筈に出来てゐる人生なら、私は晏如^{あんじょ}として自滅するより仕方がない。昔は従容^{じゆよう}として死に就く事を士^{さむらい}の本分だと心得ていた。大死でも何でもかまわない。金をとる努力をしなかつた為^{ため}に、私は従容として死に就こう。そう覚悟して私は生きてゐる。

私のような人間が多くなれば、その社会は必ず墮落する。その国家は必ず滅亡する。私は社会主義者の敵である。私は国家主義者の敵である。けれども生物学上の見地からすると、一主義者の敵も、一国家の敵菌も、それ自身としては、必ず澆刺たる一箇の生物である事を忘れてはならない。

私の両親は私に失望して死んだ。私の妻は私に虐待されて去った。私の友人は私と行動を共にする事を厭うて遠ざかった。又いろいろの処女は私に弄ばれたのである。又人妻で私の為に身を誤った女もあると云う。けれども私は彼等の誰もに対して決して罪惡を犯すなどとは思っていない。私はただかく生れたにすぎない。そうしてただかく外界と接触して来たにすぎない。正とか善とか称せらるる一箇の幻影があつて、そこにはじめて罪惡とか不正とかいうアトリビュートが生ずる。私には幻影がない。随つて正邪の觀念がない。善惡の差別が分らない。私は恐らく道德上の色盲患者なのであらう。

日の経つてゆくのが恐ろしいような気がする。勿体ない

ような氣もする。怠惰という事に対する因襲的の觀念が無意識に働いて、そうした氣を私の心に起させるのはよく分っている。怠惰と戦つて何かするの、怠惰のままにうち任せて暮らすも、結果から見ると同じ事なのだが、結果というものに重きを置く觀念がやっぱり因襲的のそれに外ならない。私は怠ける事も出来ぬ。又勿論働く氣も起らない。そうして日は経つてゆく。どしどしと経つてゆく。

明らかに私は毀潰^{くわいふ}である。社会にとって有害無益な人間である。けれどもそれに対して私は責任を持つ事が出来ぬ。私は勝手に生れたのではない。生まれたくて生まれたのではない。私の父母も私のようなものを生みたくなかつたであらう。それゆゑ父母にも責任はない。生まれて見ると、私が斯く毀潰^{くわいふ}してあつたにすぎない。これは誰にもどうする事も出来ない。一日も早く私の有害無益なる生存が社会から消滅する日を待つより外に仕方がない。但しそれは社会というものを標準にした場合にかぎる。私には社会を無視する事が出来る。利己の外何事も考えないでいる事が出来る。自己以外の一切を持って、悉くただ自己の生存の材料であると考える事が出来る。そう考えると、私は決して毀潰^{くわいふ}してはない。宇宙は皆私自身の生存を享樂さ